熊本大学教育実践研究　第35号，127－136，2018

特別支援学校におけるコンサートづくりの試み
― 特別支援教育を学ぶ学生を中心とした取り組みの報告 ―

藤　原　志　帆*

Developing Concerts for Special Education Schools
― Report of Initiatives Centered on University Students in the Special Needs Education Course ―

Shiho Fujihara

はじめに

2014年から３年間，熊本大学教育学部で特別支援教育を学ぶ学生が，熊本県立荒尾支援学校におけるスクールコンサートの企画を担当する機会をいただいた．

本稿では，各年度のスクールコンサートの内容，成果と課題について報告する．

１．平成26年度の取り組み

１）取り組みの概容

筆者が特別支援教育の音楽実践に関する研究を行っており，学生が卒業研究で荒尾支援学校の音楽の授業に関わらせていただいていたことから，2014年に筆者の研究室がスクールコンサート担当の依頼を受けた．

研究室には音楽を専門に学んだ専攻科生が２名在籍していたが，その他は特別支援教育を学ぶ音楽好きの学生である．研究室の学部生・専攻科学生13名と筆者で，自分達の特性を活かしてどのようなコンサートをつくることができるかを考えた．コンサートの演目を**表１**に示している．

まず，荒尾支援学校の児童生徒の興味・関心をリサーチして演奏する曲を選んだ．次に，選んだ曲を，小学部から高等部までの多様な実態の児童生徒が楽しめるように，耳だけではなく，目や身体全体を使って音楽を捉えられるような工夫を考えた．さらに，学生が既有の音楽技能を最大限に活かして，楽曲に込められたメッセージを届けられるように，歌唱，ハンドベル，ピアノの練習にも励んだ．

2014年12月10日，荒尾支援学校の体育館にて１時間のスクールコンサートを行い，荒尾支援学校の児童生徒や先生方と音楽を楽しんだ．コンサートの準備や進行は，高等部の茶園先生（2014年当時）にご担当いただいた．パネルシアターでは，おもちゃコンサルタントの永山氏にご協力いただいた．

表１：平成26年度のスクールコンサート演目

番号	演目
1	「レット・イット・ゴー」（全員参加の歌唱）
2	「妖怪体操第一」（全員参加の身体表現）
3	「レッツダンス」（グループごとの身体表現）
4	「きらきら星変奏曲」（ピアノ独奏）
5	「オーバー・ザ・レインボー」（ハンドベル演奏）
6	「ディズニーメドレー」（ピアノ連弾）
7	「花は咲く」（合唱）
8	「赤鼻のトナカイ」（ブラックパネルシアター）

２）各演目の内容

①第１部（プログラム１から３番）

第１部は，導入として児童生徒に人気のある曲や身体を動かす演目を用意した．当時児童生徒の間で流行していた「レット・イット・ゴー」（プログラム１番）を，コンサートの導入曲に選んだ．登場人物に扮した学生が劇で歌詞を表現し（**写真１**），児童生徒は歌を口ずさんだ．「妖怪体操第一」（プログラム２番）も，当時児童生徒の間で人気の高かった曲である．スクリーンに妖怪体操の映像を提示し，妖怪に扮した学生たちと参加者が身体表現を楽しんだ．「レッツダンス」（プログラム３番）では，学部・学級ごとにピアノの大小や速度の変化に合わせて身体表現を楽しんだ．高等部一般学級は「はるがきた」（春）に合わせて花を，中学部一般学級は「海」（夏）に合わせて波を，小学部一般学級は「うさぎ」（秋）に合わせてうさぎを，重複学級は「あわてんぼうの

* 熊本大学教育学部特別支援教育学科

写真１：「レット・イット・ゴー」の劇

写真２：「レッツダンス」の身体表現

写真３：「ディズニーメドレー」のピアノ連弾

写真４：「花は咲く」の合唱

サンタクロース」に合わせてサンタクロースの動きを表現した．１回目は大学生の手本に合わせ（**写真２**），２回目は思い思いに表現した．自ら身体を動かすことが難しい重複学級の児童生徒には，学生が近くで鈴を鳴らして音楽の変化を伝えた．

②第２部（プログラム４から７番）

第２部は演奏に耳を傾ける演目を用意した．「きらきら星演奏曲」（プログラム４番）では，音楽を専門に勉強した専攻科生がピアノの独奏を行った．長時間ピアノの音に耳を傾けることが難しい児童生徒のために，スクリーンではピアノの音に連動して動く星の映像を流した．「オーバー・ザ・レインボー」（プログラム５番）では，大学生全員でハンドベルの演奏を行った．児童生徒はハンドベルの響きを静かに楽しんでいた．「ディズニーメドレー」では，大学生と筆者の計10名が次々に入れ替わりながらピアノの連弾を行った．スクリーンには曲に合った画像を映し，児童生徒はピアノの音や大学生のダンスに合わせて拍手をしながらメドレーを楽しんだ（**写真３**）．「花は咲く」（プログラム７番）では，大学生１名と筆者の伴奏に合わせて12名が合唱を行った（**写真４**）．児童生徒は，女性と男性の声の重なりに静かに耳を傾けていた．

写真５：「赤鼻のトナカイ」のブラックパネルシアター

③第３部（プログラム８番）

第３部は，会場全体でクリスマスソングを楽しむ演目を用意した．ブラックパネルシアター（**写真５**）で児童生徒たちに「赤鼻のトナカイ」のストーリーを伝えた後，全員で「赤鼻のトナカイ」の歌唱を楽しんだ．

３）成果と課題

試行錯誤の取り組みではあったが，特別支援学校の児童生徒が楽しめるコンサートをつくることができた点が平成26年度の成果である．

１時間という長い時間，児童生徒の多くがコン

サートを楽しむことができていた．先生方の児童生徒への巧みな働きかけがあってこそ実現した時間ではあったが，学生たちが考えた視覚や身体全体で音楽を楽しめるような工夫も児童生徒を惹きつけるものになっていたと感じた．コンサート後に届いた児童生徒の感想からは，学生たちの演奏がメッセージを届けるものになっていたこともうかがえた．

平成26年度は鑑賞型の演目が多かったため，児童生徒がより主体的に楽しめる演目を用意することが，次回への課題として考えられた．

２．平成27年度の取り組み

１）取り組みの概容

平成27年度は，小学部の児童と研究室の学生による合同演奏の発表をめざした取り組みが行われており[1)]，スクールコンサートも荒尾支援学校と共同で企画することになった．コンサートの演目を**表２**に示している．

荒尾支援学校の児童生徒が出演する演目も設定され（プログラム２・３番），児童生徒は音楽の授業で練習を重ねた．小学部の児童との合同演奏（プログラム２番）には，研究室の学部生11名が参加した．小学部の菅原先生（2015年当時），藤森先生（2015年当時），深浦先生と打ち合わせを重ねながら，大学での合同練習（昼食交流を含む）を経て本番に臨んだ．

大学では，研究室の学部３年生が楽器演奏を中心とした企画（プログラム１番）を考えた．さらに，筆者が担当する「特別支援教育学実践演習Ⅱ」や「特別支援教育実践特講２」を受講している大学院生２名と専攻科生１名が，授業の中で参加型音楽活動の企画（プログラム４番）を考えた．参加型音楽活動における重複学級児童生徒のスイッチを用いた演奏については，重複学級の授業を参観した後，特別支援教育学科の大杉先生（2015年当時）の授業でプログラムを作成した．重複学級の吉村先生（2015年当時），大嶌先生（2015年当時）と打ち合わせを行い本番に臨んだ．

表２：平成27年度スクールコンサートの演目

番号	演目	発表者
1	「ディズニーメドレー」（音楽劇）	熊本大学学部生
2	「ドレミのうた」（合奏・身体表現） 「にじ」（合唱）	荒尾支援学校小学部一般学級児童、熊本大学学部生
3	「風になりたい」（合奏） 「ビリーブ」（合唱）	荒尾支援学校中学部一般学級生徒（伴奏：熊本大学学部生）
4	「クリスマスKAGURA」 「ニンニンジャー」 （参加型音楽活動）	（企画）熊本大学専攻科生・大学院生

2015年12月17日，荒尾支援学校の体育館にて１時間のスクールコンサートを行った．荒尾支援学校の児童生徒，先生方，保護者の方，大学の学生と教員が共に音楽を楽しんだ．司会は小学部の菅原先生に，音響は重複学級の林田先生にご担当いただいた．また，参加型音楽活動では中山校長先生（2015年当時）や堀川教頭先生（2015年当時）にもご協力いただいた．

２）各演目の内容

本稿では，大学生のみが企画した演目について，その内容や工夫点を紹介する．

①「ディズニーメドレー」（プログラム１番）

まず，ハンドベルで「星に願いを」を演奏し，「シンデレラ」の音楽劇を行った．「シンデレラ」では，ストーリーを，ピアノとフルートの演奏，ナレーション，劇によって知的障害のある児童生徒にわかりやすく伝えられるように工夫した（**写真６・７**）．普段耳にする機会の少ないフルートの音色に耳を傾けてもらうことも目的の一つであった．児童生徒は，フルート奏者や演じ手に注目しながら音楽を楽しんだ．

写真６：「ディズニーメドレー」の音楽とナレーション

写真７：「ディズニーメドレー」の劇

②「クリスマスKAGURA」（プログラム４番）

学生は,「しくみデザイン」が開発した体を動かすだけで演奏ができるアプリケーション「KAGURA」を，知的障害のある児童生徒の音楽活動に活かせるのではないかと採用した.「KAGURA」は，パソコンに接続された深度カメラが人の動きやジェスチャーを正確に検出し，演奏者が画面上のアイコンに手をかざすことによって自由に音楽を演奏することができるアプリケーションである[2)].

「クリスマスKAGURA」では，まず，校長先生と教頭先生がサンタに扮して登場し,「あわてんぼうのサンタクロース」のピアノ演奏に合わせて，パソコン画面上の鈴の音が出るアイコンに手をかざしてデモンストレーションを行った(**写真８**)．スクリーンにパソコンと同じ画面が提示され，会場も先生方の動きを楽しむことができた．その後，小学部，中学部，高等部の代表児童生徒が「KAGURA」による演奏を楽しんだ（**写真９**）.

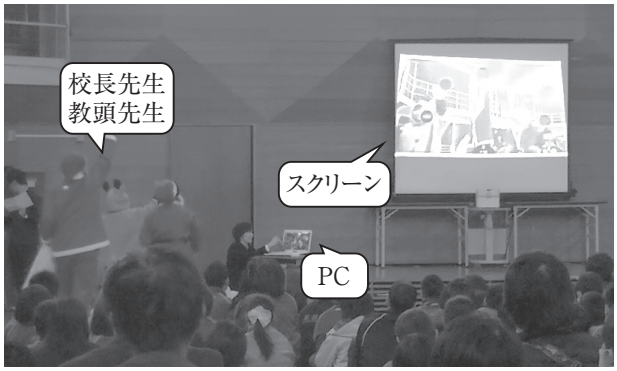

写真８：校長先生と教頭先生による「KAGURA」のデモ演奏

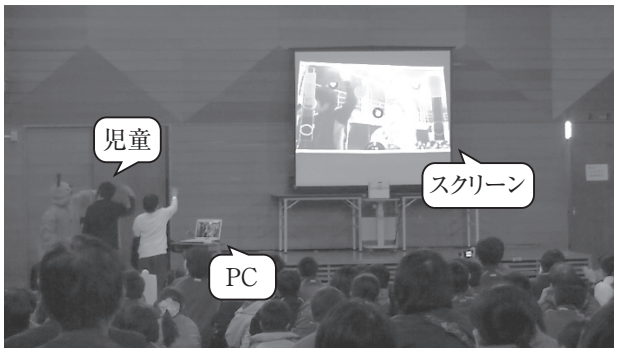

写真９：児童による「KAGURA」の演奏

③「ニンニンジャー」（プログラム４番）

身体表現による参加型音楽活動として，当時，児童生徒に人気のあった「手裏剣戦隊ニンニンジャー」の番組主題歌「なんじゃモンじゃ！ニンジャ祭り！」のダンスを採用した.

学生たちは，当日，会場全体で円滑にダンスを楽しめるように，ダンスのレクチャー VTR を作成して，事前に各学部・学級で練習しておいてもらうことを考えた．レクチャー VTR は，知的障害のある児童生徒が振り付けを覚えやすいように，ダンスをパート分けして，忍者の術として覚えていくような構成にした（**写真10**）．また，重複障害学級在籍者のうち，身体を大きく動かしてダンスを行うことが難しい児童生徒には，スイッチによる掛け声で活動に参加してもらうことを考えた．大杉先生の授業において，児童生徒が動かしやすい身体の部位でスイッチを押せば「ワッショイ」「ニンニン」などの掛け声が流れるプログラムを作成した.

当日は，重複学級の児童生徒の掛け声を紹介した後，全員で「なんじゃモンじゃ！ニンジャ祭り！」を楽しんだ．先生方との打ち合わせにおいて，学生モデルよりもいつも練習しているレクチャー VTR の映像を見た方が踊りやすい児童生徒が多いことがわかり，舞台上では学生が踊ると共にスクリーンでレクチャー VTR の映像も流した（**写真11**）．会場全体でダンスを楽しみ，重複学級の児童生徒は自分の好きなタイミングで掛け声を流して賑わいを加えた.

写真10：「ニンニンジャー」のレクチャー VTR

写真11：「ニンニンジャー」のダンスを楽しむ会場

表３：平成27年度のコンサートに対する学生の感想　N＝14

記述内容	記述数	記述例
A.コンサートの構成・演目	11	・KAGURAでは，子どもと一緒に音楽を楽しめていた．子どもが体を動かして音を出して喜んでいたので，自分も積極的に使っていきたいと思った．重複学級の子どもたちも参加できるようになっていて，すごいと思った． ・今回のコンサートで子どもが一番楽しんでいたのは，ニンニンジャ―の劇やダンスだと感じた．子どもの中には自分からステージに立ち，全員にダンスを披露したりするなど，とても盛り上がっていた．音楽を用いた活動として，子どもに演奏や劇を見せることも面白いと思うが，子どもにとってはやはり自分たちが体を動かすことや歌うこと等，直接的に活動に参加できるものの方が退屈せずに楽しむことができ，表現力を豊かにしていくことができるのではと感じた．
B.児童生徒の様子	9	・子どもたちが楽しそうにコンサートに参加していたのがすごく印象的でした．合唱のビリーブは子どもたちの声がよくひびいているなぁと思ったし，ドレミの歌も子どもたちがそれぞれのパートをちゃんとこなしていてすごく良かったと思います． ・子どもたちが，真剣にハンドベルの演奏や劇を見てきいてくれたのがうれしかったです．
C．児童生徒との関わり	7	・子どもたちの輪の中に入って発表させてもらえたこともすごくいい経験になったし，やっていてすごく楽しかったです． ・小学部との合同練習や，本番を通して，荒尾支援学校の子どもたちと交流できたことがよかった．
D．大学生による児童生徒の支援	7	・専攻科の方々のパソコンにつないだ音の出る教材は，重複障がいのある生徒のみなさんも「自分の力で音が鳴らせる」という実感が持てているように見えたが，何回もボタンを押して楽しんでいたので，力の入れやすいパソコンの配置の仕方，マイクの準備等，私ももっと配慮ができればと思った． ・KAGURAでは，マイクが入らず，せっかくスイッチを押したのに，音がでなかったため，事前にマイクや出るタイミング等の確認をしておくべきだった．
E．先生方による児童生徒の支援	6	・子どもたちの活動の様子や先生方の支援方法を近くで見ることができ，勉強になった． ・ステージに立って感じたのは，荒支の先生方が笑顔で一緒に手拍子したり踊ったりと盛り上げて下さったので，大変やりやすかった．あの支持的風土作りは見習いたいと思った．
F.音楽活動の楽しさ	4	・子ども達が楽しんでいる様子を近くで見て，自分も楽しんで演奏できた．
G．良い経験	2	・やはり，理論であったり指導例を学ぶことはもちろん大切であるけれど，それといっしょに実践してみてわかることも（感じられることも）あって，とても良い経験になりました．

３）成果と課題

学生のコンサートに対する感想（2015年12月実施，自由記述式アンケート）を**表３**にまとめている．

平成27年度は「A．コンサートの構成・演目」に触れた記述（11件）が最も多かった．初めて取り入れた参加型音楽活動の演目が，学生たちに強い印象を残したようである．続いて，「B．児童生徒の様子」に触れた記述（９件），「C．児童生徒との関わり」「D．大学生による児童生徒の支援」に触れた記述（７件）が多くなっている．学生たちにとって，コンサートが，児童生徒の様子を観察し，交流を楽しみ，自身の支援を振り返る機会になったことがうかがえる．

平成27年度の新たな成果は，特別支援学校の児童生徒の実態を考慮しながら，多様な児童生徒が主体的に楽しめる音楽活動を考えることができた点である．

「KAGURA」での児童生徒の様子を，学生は「子どもが体を動かして音を出して喜んでいた」（**表３**Aの例）と報告している．学部主事やグループ長の先生へのアンケート（2017年３月実施，自由記述式）でも，「楽器アプリを用いた参加型の活動への興味が意外に高かったのに感心した．この様な，障がいのある子どもも，全身を使って楽しく音を出せる体験型のものがあるとよい．」というご意見をいただいた．身体を動かすだけで音が鳴り，身体の動きと音の動きの関係を楽しむことができる「KAGURA」のようなツールは，多様な児童生徒の音楽活動への参加を促し，表現を拡げるのに有効であると考えられた．

また，「ニンニンジャー」での児童生徒の様子を，学生は「子どもの中には自分からステージに立ち，

全員にダンスを披露したりするなど，とても盛り上がっていた.」(**表３**Ａの例）と報告している．先生方も含めて会場全体で音楽に乗って身体表現を楽しむ様子が見られており，身体表現の力を感じたところである．レクチャー VTR も効果的であったと考える．

さらに「ニンニンジャー」での重複学級の児童生徒の様子を，学生は「専攻科の方々のパソコンにつないだ音の出る教材は，重複障がいのある生徒のみなさんも『自分の力で音が鳴らせる』という実感が持てているように見えた」(**表３**Ｄの例）と報告している．学部主事やグループ長の先生へのアンケート（2017年３月実施，自由記述式）でも，「学生さんが事前に児童生徒の実態をしっかり把握された上で，重複障がい学級も参加できるプログラムを考えていただいたので，全員で楽しめました.」というご意見をいただいた．スイッチによる演奏は，自ら大きく身体を動かすことが難しい児童生徒の音楽活動への参加を促すのに効果的であったと考える．

次回への課題として，重複学級の児童生徒にコンサート本番での活動を十分に楽しんでもらうためには，機器の準備や実態把握にさらなる配慮が必要なことがあげられた．重複学級の児童生徒の支援に携わった学生からは，「力の入れやすいパソコンの配置の仕方，マイクの準備等，私ももっと配慮ができればと思った.」(**表３**Ｄの例）という感想が報告されている．

３．平成28年度の取り組み

１）取り組みの概容

平成28年度も小学部の児童と研究室の学生による合同演奏の発表をめざした取り組みを続けていたことから，コンサートを荒尾支援学校と合同で企画した．コンサートの演目を**表４**に示している．

昨年度に引き続き，荒尾支援学校の児童生徒が出演する演目が設定された．小学部の児童との合同演奏（プログラム２番）には，研究室の学部生10名が参加した．小学部の菅原先生（2016年当時），多田先生（2016年当時），宮本先生，深浦先生と打ち合わせを重ね，２回の合同練習（昼食交流を含む）と小学部発表会（昼食交流を含む）での演奏を経て本番に臨んだ．小学部発表会には，次に述べる音楽科の学生も２名参加した．先生方に児童と関わる機会を随所に設けていただき，学生は児童との音楽活動をより一層楽しむことができた．

大学では「特別支援教育実践演習Ⅱ」を音楽科の学生が受講したことから，音楽科の学生６名（うちボランティア参加５名）とオーケストラサークルの学生１名（ボランティア参加）が加わり，多様な楽器や声による生演奏を取り入れた演目を企画することになった．

表４：平成28年度スクールコンサートの演目

番号	演目	発表者
1	「クリスマスメドレー」(アンサンブル)	熊本大学学部生・専攻科生・大学院生（音楽科学生を含む)
2	「サンバおてもやん」(合奏) 「世界中の子どもたちが」(合唱)	荒尾支援学校小学部一般学級児童，熊本大学学部生
3	「ふるさと」(合奏・合唱)	荒尾支援学校中学部一般学級生徒
4	「サンバおてもやん 2016 ARA・SHI ヴァージョン」 （全員参加の音楽活動)	（企画・演奏）熊本大学学部生・専攻科生・大学院生（音楽科学生，オーケストラサークル学生を含む)

「特別支援教育学実践演習Ⅱ」を受講している音楽科の大学院生１名と，ボランティア参加の音楽科の大学院生１名，特別支援教育学科の音楽を専門に学んだ専攻科生１名が，演奏を中心とした企画（プログラム１番）を考えた．さらに，「特別支援教育学実践演習Ⅱ」を受講している大学院生１名と「特別支援教育実践特講２」を受講している専攻科生１名を中心に，参加型音楽活動（プログラム４番）の企画を考えた．参加型音楽活動における重複学級児童のスイッチを用いた演奏については，重複学級の授業を参観した後，特別支援教育学科の大杉先生（2016年当時）が担当する授業でプログラムを作成した．重複学級の吉村先生（2016年当時），中田先生（2016年当時）と打ち合わせを行い本番に臨んだ．

2016年12月19日，荒尾支援学校の体育館にて１時間のスクールコンサートを行った．荒尾支援学校の児童生徒，先生方，保護者の方，大学の学生と教員が共に音楽を楽しんだ．司会は小学部の菅原先生（2016年度）にご担当いただいた．また，宮田校長先生をはじめ，各学部・学級の先生方に，参加型音楽活動の動画作成にご協力いただいた．

２）各演目の内容

本稿では，大学生のみが企画した演目について，その内容や工夫点を紹介する．

①クリスマスメドレー（プログラム１番）

クリスマスメドレーは，研究室の学部生と専攻科

写真12：「クリスマスメドレー」のハンドベル演奏

写真13：「クリスマスメドレー」のアンサンブル

生８名による「きよしこの夜」のハンドベル演奏からスタートした（**写真12**）．次に，音楽科の大学院生３名と学部生３名，研究室の専攻科生１名が，「赤鼻のトナカイ」と「ホワイトクリスマス」を，ソプラノ・アルトの歌声とヴァイオリン・チェロ・ピアノの音色のアンサンブルで会場に届けた（**写真13**）．この演目では，歌声や楽器の音色に耳を傾けてもらうことが目的であった．演奏前には楽器の説明を加え，演奏中は歌詞や絵をスクリーンで提示した．児童生徒は演奏の様子をじっと見つめながら，体に響く声や楽器の音を静かに感じている様子であった．

②「サンバおてもやん2016 ARA・SHIヴァージョン」（プログラム４番）

当時，ポチョムキン（餓鬼レンジャー）の楽曲「おてもやんサンバ」が復興支援ソング「サンバおてもやん2016」としてリバイバルされたところであった．大きな地震に遭った2016年の年末，熊本の復興を願ってみんなで楽しい時間を過ごしたいという思いからこの曲を選び，熊本の「火の国まつり」で踊る「サンバおてもやん」のダンスも加え，特別支援学校の児童生徒が参加しやすいように「ARA・SHIヴァージョン」にアレンジした．また，小学部の児童生徒がスクールコンサートで「サンバおてもやん」を演奏するため，児童生徒たちに同じ曲でもアレンジによって印象が変わることを伝えることも目的の一つであった．

平成27年度と同様にレクチャー VTR を事前に各学部・学級に配り，コンサート当日までに練習していただいた．今年のダンスは，「おいで，おいで，みんなでおいで，おさる，おさる，うーえ，しーた，大きな丸を描いて，パッ，パッ」と一連の動きを言葉で表し，知的障害のある児童生徒が動きを唱えながらダンスを覚えられるように工夫した（**写真14**）．

また，小学部から高等部までの児童生徒が踊りやすいように，曲のテンポを原曲より緩めて音源を作成した．

写真14：「サンバおてもやん2016 ARA・SHIヴァージョン」のレクチャー VTR

平成28年度の参加型音楽活動は，全員で音楽作品をつくりあげる構成を考えた（**表５**）．

まず，重複学級の児童生徒のスイッチによる「さぁいくばい荒尾！」のかけ声，「GOING GOING BACK BACK ２ HIGO HIGO HIGO HIGO」のラップで活動が始まる．重複学級の児童生徒の演奏する音が本人や参加者にわかりやすいように，他の音がない冒頭に演奏場面を用意した．スイッチで音を鳴らすと本人のパソコンに画像が流れ，それを全体スクリー

表５：「サンバおてもやん2016 ARA・SHIヴァージョン」の流れ

歌詞	活動
「さぁいくばい荒尾！」「GOING GOING BACK　BACK　２　HIGO HIGO　HIGO　HIGO」×４回	スイッチによる演奏（重複学級）
「おてもやん　サンバみんなで手を取り朝まで踊ろうかい・・・・・・おてもやん笑っておくんなさい　照らす太陽のように」	ダンス（全員）
「イツダディギディギ盆ダンス　サンバオリジナルフレイバー・・・・・・おてもやんサンバで GO　Let’s　go！」ラップ部分	ダンス映像（先生方）
「GOING GOING BACK　BACK　２　HIGO HIGO　HIGO　HIGO」×２回	ダンス（全員）

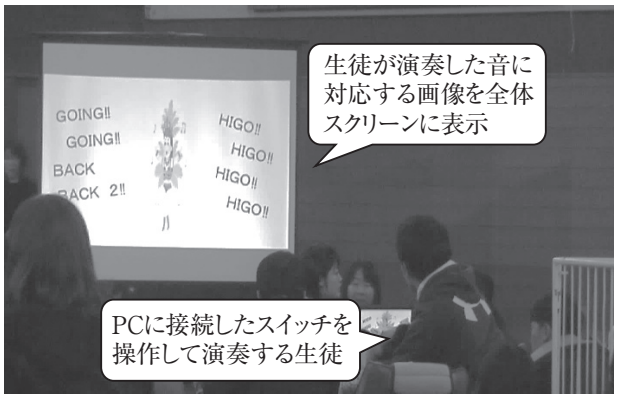

写真15：重複学級の生徒のスイッチによる演奏

写真16：「サンバおてもやん2016」演奏楽器の紹介

写真17：「サンバおてもやん2016」先生方のダンス映像

ンで映し出す工夫も試みた（**写真15**）.

その後,「おてもやん……」の歌にのって参加者全員のダンスが始まる．クリスマスメドレーで登場した楽器に，トランペット，クラリネット，フルート，鍵盤ハーモニカの生演奏も加わる（**写真16**）.

次に,「イツダディギディギ盆ダンス……」で始まるラップの部分では，事前に収録した校長先生や各学部の先生方のダンス映像をスクリーンに映し，全員参加の音楽活動を演出する（**写真17**）.

最後に全員で「GOING GOING BACK BACK 2 HIGO HIGO HIGO HIGO」のラップに合わせて踊り，活動を締めくくる.

当日は，まず，重複学級の児童生徒の掛け声やラップ音，トランペット，クラリネット，フルートなどの音色の紹介を行って，全員での演奏を始めた．機器の事前確認や活動のシミュレーションが不足し，十分に楽しんでいただけなかった部分もあったが，会場全体で一つの音楽活動をつくることができた.

3）成果と課題

学生のコンサートへの感想（2016年12月実施，自由記述式アンケート）を**表６**にまとめている.

「A．児童生徒の様子」に触れた記述（14件）が最も多く,「B．児童生徒との関わり」に触れた記述（13件）が続いている．学生たちにとって，コンサートが，児童生徒の様子を観察し，交流を楽しむ機会になったことがうかがえる．平成28年度は,「C．音楽活動の楽しさ」や「D．良い経験」に触れた記述（９件）が多いのも特徴的である．多様な楽器や声による生演奏を導入したため，コンサートが，学生にとっても音楽を楽しむ良い機会となったようである.

平成28年度の新たな成果は，児童生徒が普段触れることが少ない楽器や声楽の生演奏を取り入れた音楽活動を考えることができた点である.

学生は児童生徒の様子を「プログラム終了後，子どもたちが『ヴァイオリン弾きたい』『トランペットかっこいい』などと発言していた」（**表６**Ａの例）と報告している．また，小学部の先生方からも,「コンサート後，多くの児童が楽器演奏の真似をしていた.」という話を伺った．奏者の演奏の様子を目前にしながら身体に響く音を感じる体験は，児童生徒の音楽への興味・関心を拡げる上で非常に重要であると再認識した．このような体験の場を児童生徒に届けることは，スクールコンサートを企画する者が担う重要な役割であると考える.

平成28年度は，音楽教育を学ぶ学生や演奏活動を行う学生がコンサートづくりに加わったことで，特別支援教育を学ぶ学生に新たな学びが生まれた．特別支援教育を学ぶ学生からは,「本物の歌を聴くことは私にとって非日常のことで，今後の『音楽の見せ方』についての私自身の考え方の幅が広がる良い経験だった.」（**表６**Ｄの例）という感想が寄せられた．また，音楽教育を学ぶ学生からも,「子どもたちがわかりやすいように，また楽しめるように様々な工夫がなされていて，学ぶところが多々ありました.」（**表６**Ｅの例）という感想が寄せられており，コンサートづくりに携わった学生双方に新たな学びが生まれたことも大きな成果であった.

今後の課題としては，コンサートづくりに携わる学生が協働し入念な準備を行うことがあげられる.

表６：平成28年度のコンサートに対する学生の感想　N＝19

記述内容	記述数	記述例
A.児童生徒の様子	14	・待つことの難しいお子さんにとって鑑賞の時間ってどうなのかなと思っていたけど，しっかりと前を見て聞いていたり，集中している姿を見て嬉しくなりました. ・プログラム終了後，子どもたちが「ヴァイオリン弾きたい」「トランペットかっこいい」などと発言していたため，楽器に対する興味は強かったようです．来年もまた機会があれば，別の普段お目にかかれないような楽器を持っていきたいです.
B．児童生徒との関わり	13	・昼食などの交流があったことで，楽しみながら踊りや演奏が一緒にできたのかなと思いました. ・支援学校の子どもたちの発表を見たり，給食を食べたりすることができて，実際に子どもたちと触れ合うことができたことも，大変良い経験になったと思います.（音楽科）
C.音楽活動の楽しさ	9	・世界中の子どもたちの歌やサンバおてもやんでは，私は見ている立場でしたが，小学部と大学生が一緒に楽しそうにしている姿がとても良いなと思いました. ・多くの人たちと合奏することができて，とてもうれしかったです.（音楽科）
D．良い経験	9	・本物の歌を聴くことは私にとって非日常のことで，今後の「音楽の見せ方」についての私自身の考え方の幅が広がる良い経験だった. ・どのように一緒に演奏していくか，と考えたり，練習をしたりするのはとても勉強になりました.
E.コンサートの構成・演目	8	・子どもたち自身が発表する場面だけでなく，普段なかなか聞くことの出来ないヴァイオリンの演奏やコーラスなど聞く場面もあり，子どもたちにとっても有意義なコンサートとなったと思います. ・子どもたちがわかりやすいように，また楽しめるように様々な工夫がなされていて，学ぶところが多々ありました.（音楽科）
F．大学生による児童生徒の支援	8	・特に「おてもやんサンバ2016」は，機材や児童生徒の場所，楽器の音量など様々な要素が重なりあって成立するものなので，事前の入念な準備や予行演習が必要だと感じた. ・重複クラスのスイッチを担当しましたが，もっと色んな子に回してあげたかったと反省しました．事前に（できればですが）子どもとかかわり少しでもその子を知っておくと，スムーズにできたのではないかと思います.
G.特別支援学校の先生方の大学生への配慮	3	・先生方の私たちに対する配慮が本当にありがたかった．大学生企画については私たちの意向を実現できるよう動いてくださり，問題が生じた場合はその場ですぐに対応してくださり，先生方のご協力のおかげで私たちは参加させていただけたのだと思う.

「サンバおてもやん2016ARA・SHIヴァージョン」について，学生は「機材や児童生徒の場所，楽器の音量など様々な要素が重なりあって成立するものなので，事前の入念な準備や予行演習が必要だと感じた.」（**表６**Ｆの例）という感想を寄せている．今回はカリキュラムの関係で，全員での練習が一度しか設けられなかったが，多くの者が関わって複雑な音楽活動を行う場合は，合同練習や意見交換の場が複数回必要であると感じた．その中で，異なる専門性を活かして演奏や活動を考えていくことができれば，特別支援学校の児童生徒のニーズに応じたコンサートが実現するであろう.

また，重複学級の児童生徒がコンサートを十分に楽しむための方法をさらに追求することも課題として残った.

重複学級の児童生徒の支援に携わった学生からは，「事前に（できればですが）子どもとかかわり少しでもその子を知っておくと，スムーズにできたのではないかと思います.」（**表６**Ｆの例）という感想が寄せられた．学部主事・グループ長へのアンケート（2017年３月実施，自由記述式）でも，「欲を言えば，自分が押してどの音が鳴っているのか（他の音も出ているので）わかりにくかったのではないかということと，事前に何回か練習ができれば，ということでしょうか.」という意見が寄せられた.

前年度の経験から活動の改善を試みたが，重複学級の児童生徒にコンサートを十分に楽しんでもらうためには，学生が長期的に児童生徒と関わり，児童生徒とスイッチの操作に習熟する機会が必要であると考えた.

おわりに

本稿では，特別支援学校におけるコンサートづくりについて３年間の試みを振り返った.

特別支援学校におけるコンサートづくりをとおして，特別支援教育を学ぶ学生と筆者は，知的障害のある児童生徒の実態に応じた音楽活動の手立てを多く学ぶことができた．また，音楽教育を学ぶ学生や演奏活動を行う学生と共にコンサートを行うことで，コンサートの意味を再認識する機会が得られた.

今回は学校全体という規模の大きなコンサートであったため聴衆すべての感想の把握が難しかったが，今後機会があれば，児童生徒や先生方の感想を伺いながら小規模なコンサートを重ねて，特別な支援が必要な聴衆のニーズに応じたコンサートづくりに取り組んでみたいと考えている.

謝辞

スクールコンサートの実施にご協力いただきました荒尾支援学校の先生方に心より感謝申し上げます.

付記

本実践の一部は，JSPS 科研費JP26381220の助成を受けて行ったものである.

注および引用

１）藤原志帆・菅原久美子・藤森智美・深浦知恵（2017）「音楽科の授業づくりにおける特別支援学校と大学の共同実践－特別支援学校児童と大学生による合同演奏の発表に向けた取り組み－」『熊本大学教育実践研究』34, pp. 67-76.

２）http://www.kagura.cc/jp/（2017年９月30日閲覧）